

長崎県におけるHTLV-I母児感染予防の現況

(分担研究：保健指導班HTLV-I抗体陽性妊婦から生まれた児の指導と管理)

土居 浩, 辻 芳郎

要約：HTLV-I母児感染の経路解明と予防法を確立するため1987年8月より長崎県で開始された人工栄養によるATL prevention program Nagasaki, 1987 (APP Nagasaki, 1987)における当科での出生児の追跡調査状況を検討した。1987年8月1日より1988年5月31日までにHTLV-Iキャリア妊婦より出生し当科に出生連絡のあった児138人中1988年12月31日まで、すなわち生後6カ月で当科を受診した児は71人(51.4%)で比較的良好な捕捉率を示した。児の栄養方法は人工栄養115人(83.3%)、母乳栄養5人(3.6%)不明18人(13.1%)と各産科より報告されており、実際に当科を受診した71人の児でも1例を除き全て人工栄養であった。このことからプログラムが比較的順調に進行していると考えられた。さらに受診したキャリア母親へのアンケート調査結果ではATLに関してよりわかりやすい解説が必要であること、子供への感染が心配であると答えた母親が最も多く約1/3の母親は自分自身のATL発症の不安を持っていること、人工栄養を我々が予測したほど不安に感じていないこと、などがわかった。

見出し語：HTLV-I母児感染、人工栄養、APP Nagasaki, 1987

研究方法：APP Nagasaki, 1987では産科より児の出生状況と追跡病院小児科への紹介状の発行状況が把握されており小児科への受診は生後6. 12. 18. 24. 36カ月時に行われている。今回、

- I. 長崎大学医学部小児科への紹介状況と実際に来院した児の数を比較したキャリア妊婦より出生した児の追跡調査状況
- II. 来院したキャリア母親に対してATLについての知識や医師の説明状況、キャリアで

長崎大学医学部小児科 (Dep. of Pediatrics, Nagasaki Univ.)

あることを知った時の心理状態などについて行った下記のアンケート調査の結果について検討した。

結果：

I. 出生児の追跡調査状況

1987年8月1日より1988年5月31日までにHTLV-Iキャリア妊婦より出生し当科に出生連絡のあった児は138人であった。児の栄養方法については人工栄養115人(83.3%)、母乳栄養5人(3.6%)、不明18人(13.1%)と報告されている138人の中で1988年12月31日まで、すなわち生後6カ月で当科を受診した者は71人で受診率は51.4%であった。栄養方法は1例を除き全て人工栄養であった。

II. アンケート調査結果

1. 検査を受ける前からATLについて知っていましたか。

- 1) まったく知らなかった。 11 (50%)
- 2) 新聞、雑誌、などで少し知っていた。 10 (45%)
- 3) 詳しく知っていた。 1 (5%)

2. 検査を受ける時産科医師からATLについて十分説明を受けましたか。

- 1) 十分な説明は受けなかった。 7 (32%)
- 2) 説明は受けたがよくわからなかった。 6 (27%)
- 3) わかるまで十分な説明を受けました。 9 (41%)

3. 自分がATLの保因者(キャリア)であるといわれた時どう思いましたか。(複数回答あり)

- 1) びっくりした。 16
- 2) 子供にうつらないかと不安になった。 11
- 3) 自分がATLにならないかと不安になった。 7
- 4) よく意味がわからなかった。 2
- 5) 平気だった。 0

4. キャリアであるといわれたときATLについて医師から十分な説明を受けましたか。

- 1) 十分な説明は受けなかった。 2 (9%)
- 2) 説明は受けたがよくわからなかった。 7 (32%)
- 3) 十分な説明を受けた。 13 (59%)

5. どうしたらよいか誰かにすぐに相談しましたか。(複数回答あり)

- 1) 夫 20
- 2) 母(自分の) 8
- 3) 舅、姑 0
- 4) 友人 0

5) その他 ()
4 (姉2、父1、医師1)

6. キャリアであることを知られたくない人が
家族にいますか。(複数回答あり)

- 1) 夫 0
2) 母(自分の) 2
3) 舅, 姑 5
4) その他 ()
1 (夫以外全て)
なし 2

回答なし 13

7. 母乳でうつるから母乳を止めたほうがよい
といわれた時どう思いましたか。

- 1) 子供にうつさないため積極的
に止めようと思った。 12 (55%)
2) 仕方がないので止めようと思
った。 8 (36%)
3) 止めたいがいろいろな事情で
止められないと思った。 0
4) どうしても母乳を飲ませよう
と思った。 0
5) どうしてよいかわからなかつ
た。 1

回答なし 1

8. ミルクにするか母乳にするか誰かに相談し
て決めましたか。(複数回答あり)

- 1) 自分1人で決めた。 5
2) 夫に相談して 14
3) 母(自分の)に相談して 3
4) 舅, 姑に相談して 0
5) 友人に相談して 0
6) その他 ()
1 (医師)

回答なし 1

9. ミルクで育てることに不安はありましたか。
(複数回答あり)

- 1) まったくなかった。 10
2) 病気について不安があった。 6
3) 子供の情緒の発達について不
安があった。 5
4) 子供の身体の発達について不
安があった。 0
5) 経済的な不安があった。 0
6) ミルクにすることで自分がキ
ャリアであることが他人にわ
からないかと不安であった。

0

回答なし2

考案：

I. 出生児の追跡調査状況

9カ月の調査期間で当科紹介を受けた者は138人で1年に換算すると約180人が紹介されることになる。この数はあくまで受診予定数であるが長崎県でキャリア妊婦より出生する児の約1/4にあたり当科では出生児の追跡調査のかなりの部分を受け持っていると考えられた。生後6カ月時の実際の受診者数は71人で受診率は71/138(51.4%)で比較的高い受診率を示した。受診率をさらに向上させるため電話や葉書などで受診を要請するかどうかはプライバシーなどの問題もあり今後の検討が必要である。

II. アンケート調査

1. 検査前の妊婦のATLに関する知識については少しでも知識を持っていたものは50%にしかすぎず残りの50%は全く持っていなかった。ATL多発地域では妊婦教室や産科外来でATLの知識を普及させることがHTLV-I抗体スクリーニングを効率的にかつ円滑に行うために必要と考えられた。

2. 検査を受ける時の医師の説明状況については血液検査ということだけでほとんど説明を受けていない者が約30%あった。約60%の妊婦が検査の意味について把握していなかった。

3. キャリアといわれた時の妊婦の反応ではびっくりしたが最も多く、ついで生まれてくる子供にうつさないかと心配したが多かった。自分自身のATL発症についても約1/3の妊婦が心

配をしておりキャリアであることの告知には十分な注意が必要と考えられた。

4. キャリアであることの説明については90%以上の妊婦が十分な説明を受けたとしており実際に告知にあっている産科医の努力が窺えた。しかし1/3の妊婦はATLやHTLV-Iについてあまり理解できていないようである。プログラム開始前に説明内容の手引書を作製し各産科等に配布したがATLやHTLV-I母児感染について十分理解してもらうためには内容をさらにわかりやすくする必要があると思われる。

5. ほとんどの妊婦が夫を相談相手としてしているが正常の夫婦関係であればむしろ当然と考えられる。ついで妊婦自身の母親が多かった。夫の身内に相談した者はなかった。

6. 家族の中でキャリアであることを知られたくない人では設問が悪く回答なしが最も多かった。回答なしが知られたくない人がいないのかすでに知られているので回答できないのかははっきりしなかった。それ以外では舅姑が多く告知には常に家族問題の危険性をはらんでいることが推測された。実際に姑に話をした妊婦では姑から責められる者ばかりでなく逆に姑が何もいわないで優しくしてくれるのがかえって心苦しいという者もあった。自分がキャリアであることを話せば母親自身がキャリアであることを心配しないかと自分自身の母親にも知られたくない妊婦も2人あった。

7. 回答者がほとんど人工栄養を選択しているためかもしれないが母乳をやめるにあたっては子供にうつさないため積極的にやめた妊婦が5

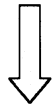
5%あり、子供にうつさないためには仕方がないと判断した母親が36%あった。母乳、特に授乳に対する母親の思い入れは強いが目的を持った人工栄養の導入に対してはかなり積極的に受け入れてもらえているようである。

8. 母乳中止の決断は夫に相談して決めた妊婦が最も多かったが約1/4は妊婦自身が決断していた。HTLV-Iが子供に感染し将来ATLを発症する不安ばかりでなく自分と同じキャリアにたくないという気持ちを持った母親が多いからかもしれない。

9. 回答者のほとんどが人工栄養を選択しているためかもしれないが人工栄養にたいする不安は予想に反して半数の人が全く不安を持っていなかった。むしろ不安を持っていなかったからこそ人工栄養を選択できたのかもしれないし母乳を推進してきた小児医としてはまことに残念ではあるが現在ではこれが一般的な考えかもしれない。感染症や種々の疾患についての不安を持つ妊婦や情緒発達についての不安を持つ妊婦は約1/4にみられたが身体発育について不安をもつものは1人もなかった。最近の傾向として子供の身体発育が人工栄養によって障害されると考えている母親は少ないようである。

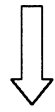
本アンケート調査はキャリア母親達がどの程度ATLやHTLV-Iについて理解しているかを調べるためのものではなくプログラムの運営状況や母親の心理状態、医師の説明や対応に対する満足度を知るために行ったものである。当小児科外来を受診し本アンケート調査の対象となったキャリア母親のほとんどが人工栄養を選択しているため調査結果は偏ったものになっ

ている可能性は否定できない。特に設問7, 9の回答についてはこの影響が強いかも知れない。キャリア母親の平均的な回答を得るためには母乳を選択したキャリア母親に対しても同じアンケートを実施すべきではあるが現実的には母乳を選択した多くのキャリア母親はプログラムに参加しておらずプライバシーの問題もあり思うように手の付けられない状況にある。今後これらの母親についてもできるだけ多く調査を行い、さらにつぎの段階として追跡調査を終了した母親について家族問題や人工栄養導入によるアレルギーや感染症などの諸問題についての調査を行う予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:HTLV-1 母児感染の経路解明と予防法を確立するため 1987 年 8 月より長崎県で開始された人工栄養による ATL prevention program Nagasaki, 1987(APP Nagasaki, 1987)における当科での出生児の追跡調査状況を検討した。1987 年 8 月 1 日より 1988 年 5 月 31 日までに HTLV-1 キャリア妊婦より出生し当科に出生連絡のあった児 138 人中 1988 年 12 月 31 日まで、すなわち生後 6 ヶ月で当科を受診した児は 71 人(51.4%)で比較的良好な捕捉率を示した。児の栄養方法は人工栄養 115 人(83.3%)、母乳栄養 5 人(3.6%)不明 18 人(13.1%)と各産科より報告されており、実際に当科を受診した 71 人の児でも 1 例を除き全て人工栄養であった。このことからプログラムが比較的順調に進行していると考えられた。さらに受診したキャリア母親へのアンケート調査結果では ATL に関してよりわかりやすい解説が必要であること、子供への感染が心配であると答えた母親が最も多く約 1/3 の母親は自分自身の ATL 発症の不安を持っていること、人工栄養を我々が予測したほど不安に感じていないこと、などがわかった。